

母や被爆者に聞いた話

おさかすずか
櫻坂鈴香さん

私は原爆が投下された2年後に生まれ、戦争を知りません。でも、長崎県内で育ったので、原爆が投下された時の様子、その後何年も経ってからの被爆者の方々の苦しみや悲しみを身近で聞いたり、見たりしてきました。

母に聞いた話では、長崎から10km以上離れた町に住んでいた昭和20年8月9日午前11時頃、この日は太陽が照りつける蒸し暑い日で、かすかな爆音がして空を見上げると白い物体がゆっくりと落ちていくのが見えたそうです。すると間もなく鋭い閃光が走り、その直後、大音響がして、とても大きな爆弾が炸裂したに違いないと思ったそうです。爆風で家の雨戸は吹き飛ばされ、障子は外れ、窓ガラスは粉々に、何がどうなっているのか全く分からず茫然と立ちすくんでいたそうです。

爆弾が落下したと思われる場所の空は、一面に煙で覆われ、間もなく煙幕を張ったような雲が広がり、見えていた空は一面に真っ暗になり、太陽の光が消されてしまった感じで夜のような、まるで世の中が一変した感じだったそうです。

それから、看護婦をしていた伯母の話では、やけどを負った人たちの姿は尋常ではなかった。顔は焼けただれて膨れ上がり、皮膚は溶けてだらりと垂れ下がって、まるでおばけのようで見るとも悲惨な姿だったと…。

治療に来た人や運び込まれた人たちは行き先もなく、教室が入院室。ムシロや毛布を敷き詰めたところに休ませ、男も女も子どもも皆一緒。耳の穴や鼻からはウジ虫がボロボロ出る。空き缶とピンセットを持って、患者さ

んに食いついているウジ虫取りから始め、そっと取るとなかなか取れず、乱暴にピンセットで引っ張ると、痛いと鳴き声ともため息ともつかない声が聞こえてきた。取っても取っても金バイがどこからか飛んできて、卵を産みつけていく。その繰り返しであったそうです。

患者食はにぎり飯。手も顔を焼けただれ、言葉も言えない人でも「おにぎりよ」と言う口を開けたそうです。その口の中で、白いものが動いた。それは何ということか、ウジ虫だったことに体中がゾツとしたそうです。

歯茎からは出血、髪をくしでとくと一度にガバッと抜け、眉毛も抜け、紫斑点が出る。それは生きているのが大変な状態だったそうです。

目に焼きついて忘れられないのが、我が子をしっかりと抱きしめ、眠ったままの姿で死んでいる母親の乳房にむしゃぶりつき、泣きじゃくる乳児のこと、また夜になると校庭のすみで死体を焼いて赤々と燃える炎に「死んだ者が苦しかったか、生きている者が苦しいのか、この時から皆の苦しみが始まったんだよ。」と貧血と出血で苦しんでいました。

年月が経ち、私は14歳、中学2年生の時です。40代女性の素敵な国語の先生は、真夏の暑い時でもいつも長袖、タートルネック、長ズボンとすっぽり体を包む服装でした。ある日、先生に尋ねたのです。

「いつもすっぽり体を包んで暑くないのですか？涼しい服装にしたらいいいのに」と…。すると先生は、「人にはふれられたくないことも多々あるものよ。でもよく見なさい。悲惨な原爆の爪跡を」と、悲しい目をされて、ケロイドになった首から腕を見せてくださいました。涙が出て止まりませんでした。首や腕だけでなく、体中ケロイドで皮膚は引きつって痛くて眠れない時もあると話してくださいました。また、婚約者がいたけれど、男性の両親に

「おばけみたいな人は嫁としてふさわしくない。それにどんな子どもが産まれるか心配だから」と大反対されたことも話してくださいました。

心の傷にふれてしまった申し訳なさが今でも心に深く残っています。でも自分のこと、体を見せて戦争の悲惨さを伝えてくださった先生に感謝しています。

産まれた子どもの顔を見ることもなく戦死した伯父や両親、伯母、恩師はもうこの世にいません。戦後 70 年、この悲惨な現実にしっかりと目を向けて、語り続けていくことは、私の務めだと思っております。